

## 7 2重積分とは

2変数関数の積分を定義する。

### 7.1 2変数関数の Riemann 和

$f$  を以下の有界な長方形  $K$  で定義された有界な 2変数関数とする。

$$K = [a, b] \times [c, d] := \{ (x, y) \mid a \leq x \leq b, c \leq y \leq d \}$$

区間  $[a, b]$  を  $m$  個に、区間  $[c, d]$  を  $n$  個に分割し、長方形  $K$  を  $mn$  個に分割する。

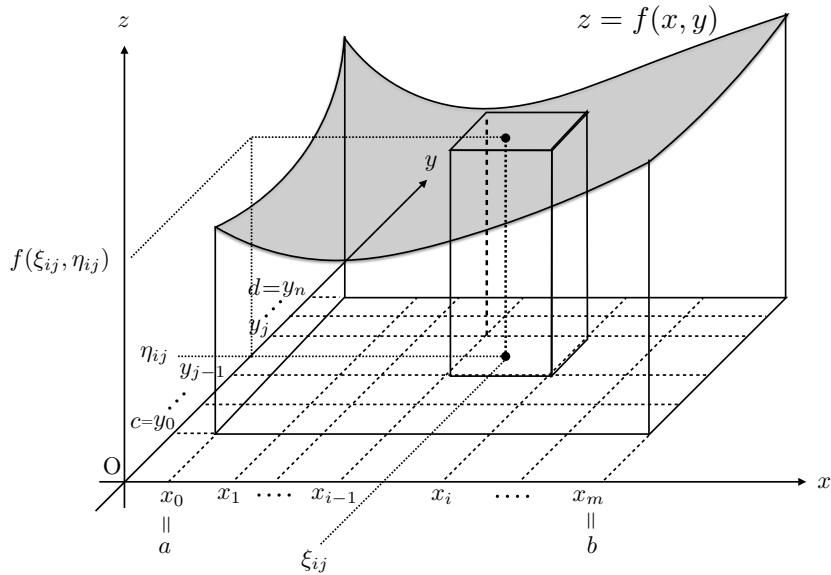
$$\begin{aligned} a &= x_0 < x_1 < x_2 < \cdots < x_{m-1} < x_m = b \\ c &= y_0 < y_1 < y_2 < \cdots < y_{n-1} < y_n = d \end{aligned}$$

この  $(m + n + 2)$  個の点の組  $\Delta = (x_0, \dots, x_n; y_0, \dots, y_n)$  を  $K$  の分割と呼ぶ。各小長方形から代表点  $(\xi_{ij}, \eta_{ij}) \in [x_{i-1}, x_i] \times [y_{j-1}, y_j]$  を選ぶ。このとき、

$$R(\Delta, \{(\xi_{ij}, \eta_{ij})\}, f) := \sum_{i=1}^m \sum_{j=1}^n f(\xi_{ij}, \eta_{ij})(x_i - x_{i-1})(y_j - y_{j-1})$$

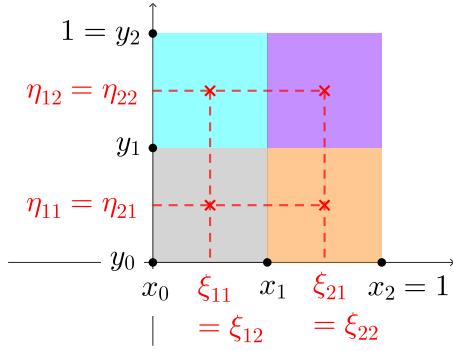
を分割  $\Delta$  と代表点集合  $\{(\xi_{ij}, \eta_{ij})\}$  に関する  $f$  の **Riemann 和**という。

ここで定義した Riemann 和は下図のように、底面積が  $(x_i - x_{i-1})(y_j - y_{j-1})$  で、高さが  $f(\xi_{ij}, \eta_{ij})$  の細長い直方体たちの体積を足し合わせたものである。これは  $z = f(x, y)$  のグラフと  $xy$  平面と平面  $x = a, x = b, y = c, y = d$  で囲まれた図形の体積を近似している。ただし、グラフが  $xy$  平面より下にある部分の Riemann 和は負の値である。



簡単な Riemann 和を実際に計算してみよう.

**例 7.1.**  $f(x, y) = x^2 + y^2$  とする. 下図のように,  $\Delta = (x_0, x_1, x_2; y_0, y_1, y_2) = (0, \frac{1}{2}, 1; 0, \frac{1}{2}, 1)$  を正方形  $[0, 1] \times [0, 1]$  の分割とし, 各小長方形  $[x_{i-1}, x_i] \times [y_{j-1}, y_j]$  の中心を  $(\xi_{ij}, \eta_{ij})$  とする.



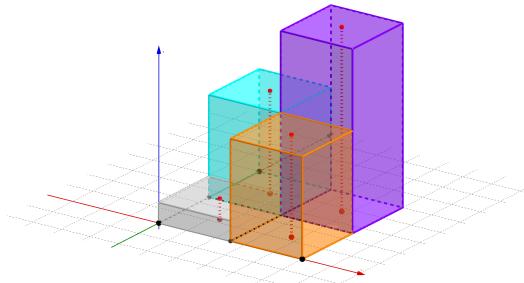
代表点たちの具体的な座標は以下の通りである.

$$(\xi_{11}, \eta_{11}) = \left( \frac{1}{4}, \frac{1}{4} \right), \quad (\xi_{12}, \eta_{12}) = \left( \frac{1}{4}, \frac{3}{4} \right), \quad (\xi_{21}, \eta_{21}) = \left( \frac{3}{4}, \frac{1}{4} \right), \quad (\xi_{22}, \eta_{22}) = \left( \frac{3}{4}, \frac{3}{4} \right)$$

この分割  $\Delta$  と代表点集合  $\{(\xi_{ij}, \eta_{ij})\}$  に関する関数  $f(x, y)$  の Riemann 和は

$$\begin{aligned} R(\Delta, \{(\xi_{ij}, \eta_{ij})\}, f) &= \sum_{i=1}^2 \sum_{j=1}^2 f(\xi_{ij}, \eta_{ij})(x_i - x_{i-1})(y_j - y_{j-1}) \\ &= f(\xi_{11}, \eta_{11})(x_1 - x_0)(y_1 - y_0) + f(\xi_{12}, \eta_{12})(x_1 - x_0)(y_2 - y_1) \\ &\quad + f(\xi_{21}, \eta_{21})(x_2 - x_1)(y_1 - y_0) + f(\xi_{22}, \eta_{22})(x_2 - x_1)(y_2 - y_1) \\ &= f\left(\frac{1}{4}, \frac{1}{4}\right)\left(\frac{1}{2} - 0\right)\left(\frac{1}{2} - 0\right) + f\left(\frac{1}{4}, \frac{3}{4}\right)\left(\frac{1}{2} - 0\right)\left(1 - \frac{1}{2}\right) \\ &\quad + f\left(\frac{3}{4}, \frac{1}{4}\right)\left(1 - \frac{1}{2}\right)\left(\frac{1}{2} - 0\right) + f\left(\frac{3}{4}, \frac{3}{4}\right)\left(1 - \frac{1}{2}\right)\left(1 - \frac{1}{2}\right) \\ &= \frac{1}{32} + \frac{5}{32} + \frac{5}{32} + \frac{9}{32} = \frac{5}{8} \end{aligned}$$

である. この値は下図の 4 個の直方体の体積の和に等しい.



## 7.2 2重積分の定義

$f$  を有界な長方形  $K = [a, b] \times [c, d]$  で有界な 2 変数関数とする。長方形  $K$  の分割

$$\Delta = (x_0, \dots, x_m; y_0, \dots, y_n)$$

に対し、

$$|\Delta| := \max_{1 \leq i \leq m, 1 \leq j \leq n} \{ (x_i - x_{i-1}), (y_j - y_{j-1}) \}$$

とする。 $|\Delta| \rightarrow 0$  のとき、分割の仕方と代表点集合  $\{(\xi_{ij}, \eta_{ij})\}$  の取り方によらず Riemann 和  $R(\Delta, \{(\xi_{ij}, \eta_{ij})\}, f)$  が一定の値に収束するならば、 $f$  は  $K$  で (Riemann) 重積分可能であるという。このとき、その極限値を以下のように表し、 $f$  の  $K$  上の 2 重積分という。

$$\iint_K f(x, y) dx dy \quad (7.1)$$

2 変数関数が重積分可能であるかどうかを調べるのは 1 変数関数のとき以上に難しいが、1 変数関数のときと同様に、有界な長方形  $[a, b] \times [c, d]$  上の連続関数は重積分可能であることが知られている。

**定理 7.2.** 有界な長方形  $K = [a, b] \times [c, d]$  上連続な 2 変数関数は  $K$  で重積分可能である。

2 変数関数  $f$  が有界な長方形  $K = [a, b] \times [c, d]$  で連続であれば、 $K$  のいかなる分割  $\Delta$  と代表点集合に対しても、 $|\Delta| \rightarrow 0$  でさえあれば必ず Riemann 和は一定の値に近づき、その値が (7.1) に等しいことをこの定理 7.2 は主張している。

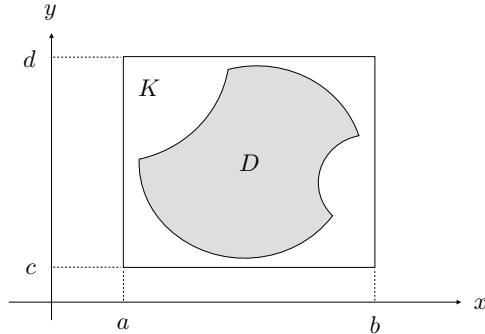
より一般的な有界閉領域  $D$  に対しては、下図のように  $D$  を含む長方形  $K = [a, b] \times [c, d]$  を 1 つ取り、

$$f^*(x, y) = \begin{cases} f(x, y) & ((x, y) \in D) \\ 0 & ((x, y) \notin D) \end{cases}$$

として、 $f^*$  が  $K$  上重積分可能なら  $f$  は  $D$  上重積分可能であるとし、

$$\iint_D f(x, y) dx dy = \iint_K f^*(x, y) dx dy$$

によって  $f$  の  $D$  上の 2 重積分を定義する。 $D$  上の重積分の値は  $D$  を含む長方形  $K$  の取り方によらない。



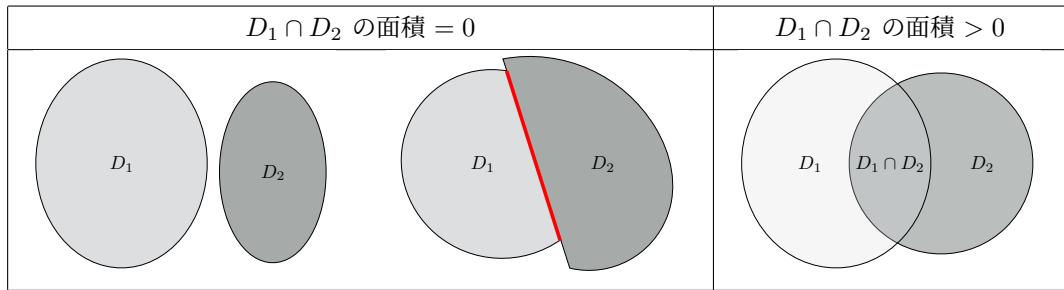
### 7.3 2重積分の諸性質

**定理 7.3** (2重積分の線形性).  $f, g$  を有界閉領域  $D$  上重積分可能な2変数関数とする。定数  $\alpha, \beta \in \mathbb{R}$  に対して以下が成り立つ。

$$\iint_D (\alpha f(x, y) + \beta g(x, y)) dx dy = \alpha \iint_D f(x, y) dx dy + \beta \iint_D g(x, y) dx dy$$

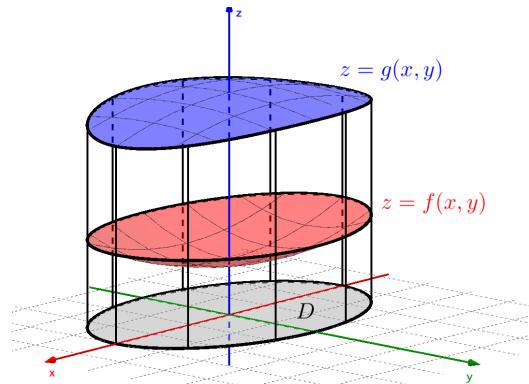
**定理 7.4.** 2つの有界閉領域  $D_1, D_2$  の共通部分  $D_1 \cap D_2$  の面積が 0 のとき、 $D_1 \cup D_2$  上重積分可能な関数  $f$  に対して以下が成り立つ。

$$\iint_{D_1 \cup D_2} f(x, y) dx dy = \iint_{D_1} f(x, y) dx dy + \iint_{D_2} f(x, y) dx dy$$



**定理 7.5.** 2変数関数  $f, g$  が有界閉領域  $D$  上重積分可能かつ  $f(x, y) \leq g(x, y)$  なら以下が成り立つ。

$$\iint_D f(x, y) dx dy \leq \iint_D g(x, y) dx dy$$



**定理 7.6.** 有界閉領域  $D$  上重積分可能な2変数関数  $f$  に対して以下が成り立つ。

$$\left| \iint_D f(x, y) dx dy \right| \leq \iint_D |f(x, y)| dx dy$$

## 7.4 累次積分による2重積分の計算

長方形上の連続関数の2重積分は累次積分によって計算できる。

**定理 7.7.** 長方形  $[a, b] \times [c, d]$  上の連続関数  $f$  に対して以下が成り立つ。

$$\iint_{[a,b] \times [c,d]} f(x, y) \, dx dy = \int_a^b \left( \int_c^d f(x, y) \, dy \right) \, dx = \int_c^d \left( \int_a^b f(x, y) \, dx \right) \, dy$$

次節でこの定理 7.7 を拡張し、より一般的な有界閉領域上の2重積分の計算方法を与える。

**例 7.8.**

$$\begin{aligned} \iint_{[0,1] \times [0,2]} (x^2 + y^2) \, dx dy &= \int_0^1 \left( \int_0^2 (x^2 + y^2) \, dy \right) \, dx = \int_0^1 \left[ x^2 y + \frac{y^3}{3} \right]_{y=0}^{y=2} \, dx \\ &= \int_0^1 \left( 2x^2 + \frac{8}{3} \right) \, dx = \left[ \frac{2}{3} x^3 + \frac{8}{3} x \right]_0^1 = \frac{10}{3} \end{aligned}$$

あるいは、次のようにも計算できる。

$$\begin{aligned} \iint_{[0,1] \times [0,2]} (x^2 + y^2) \, dx dy &= \int_0^2 \left( \int_0^1 (x^2 + y^2) \, dx \right) \, dy = \int_0^2 \left[ \frac{x^3}{3} + xy^2 \right]_{x=0}^{x=1} \, dy \\ &= \int_0^2 \left( \frac{1}{3} + y^2 \right) \, dy = \left[ \frac{y}{3} + \frac{y^3}{3} \right]_0^2 = \frac{10}{3} \end{aligned}$$

**例 7.9.**

$$\begin{aligned} \iint_{[0,\pi] \times [0,\pi/3]} \sin(x - y) \, dx dy &= \int_0^\pi \left( \int_0^{\pi/3} \sin(x - y) \, dy \right) \, dx = \int_0^\pi \left[ \cos(x - y) \right]_{y=0}^{y=\pi/3} \, dx \\ &= \int_0^\pi \left( \cos\left(x - \frac{\pi}{3}\right) - \cos x \right) \, dx = \left[ \sin\left(x - \frac{\pi}{3}\right) - \sin x \right]_0^\pi \\ &= \sin \frac{2\pi}{3} - \sin\left(-\frac{\pi}{3}\right) = \sqrt{3} \end{aligned}$$

あるいは、次のようにも計算できる。

$$\begin{aligned} \iint_{[0,\pi] \times [0,\pi/3]} \sin(x - y) \, dx dy &= \int_0^{\pi/3} \left( \int_0^\pi \sin(x - y) \, dx \right) \, dy = \int_0^{\pi/3} \left[ -\cos(x - y) \right]_{x=0}^{x=\pi} \, dy \\ &= \int_0^{\pi/3} (-\cos(\pi - y) + \cos(-y)) \, dy = \left[ \sin(\pi - y) + \sin y \right]_0^{\pi/3} \\ &= \sin \frac{2\pi}{3} + \sin \frac{\pi}{3} = \sqrt{3} \end{aligned}$$

## 7.5 練習問題

次の長方形上の 2 重積分を計算しよう.

$$(1) \iint_{[-1,1] \times [1,2]} (x^3 - y^2) \, dxdy$$

$$(2) \iint_{[0,1] \times [-1,0]} e^{2x-3y} \, dxdy$$

$$(3) \iint_{[0,2] \times [0,1]} xe^{xy} \, dxdy$$

$$(4) \iint_{[0,\pi/2] \times [1,e]} (\cos x) \log y \, dxdy$$

答え : (1)  $-\frac{14}{3}$  (2)  $\frac{1-e^2-e^3+e^5}{6}$  (3)  $e^2 - 3$  (4) 1

## 7.6 (おまけ) Riemann 和の極限としての2重積分

長方形上の2重積分の値を Riemann 和の極限として計算する例を挙げておく。

例 7.10.  $\iint_{[0,1] \times [0,1]} (x^2 + y^2) \, dx dy$

正方形  $[0, 1] \times [0, 1]$  を  $x$  方向と  $y$  方向それぞれ  $n$  等分して得られる分割を

$$\Delta_n = (x_0, x_1, \dots, x_n ; y_0, y_1, \dots, y_n)$$

とし、各小正方形  $[x_{i-1}, x_i] \times [y_{j-1}, y_j]$  の中心（対角線の交点）を代表点  $(\xi_{ij}, \eta_{ij})$  とする。つまり、

$$x_i = \frac{i}{n}, \quad y_j = \frac{j}{n}, \quad \xi_{ij} = \frac{x_{i-1} + x_i}{2}, \quad \eta_{ij} = \frac{y_{j-1} + y_j}{2}$$

である。この分割  $\Delta_n$  と代表点集合  $\{(\xi_{ij}, \eta_{ij})\}$  に関する  $f(x, y) = x^2 + y^2$  の Riemann 和を  $S_n$  とする。

$$S_n := R(\Delta_n, \{(\xi_{ij}, \eta_{ij})\}, f) = \sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^n f(\xi_{ij}, \eta_{ij})(x_i - x_{i-1})(y_j - y_{j-1})$$

$f$  は  $[0, 1] \times [0, 1]$  で連続なので、定理 7.2 からこの  $S_n$  は  $n \rightarrow \infty$  のとき収束し、

$$\lim_{n \rightarrow \infty} S_n = \iint_{[0,1] \times [0,1]} (x^2 + y^2) \, dx dy$$

である。各  $x_i - x_{i-1}, y_j - y_{j-1}$  はいずれも  $\frac{1}{n}$  であり、 $\xi_{ij} = \frac{2i-1}{2n}, \eta_{ij} = \frac{2j-1}{2n}$  なので

$$\begin{aligned} S_n &= \sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^n \left( \left( \frac{2i-1}{2n} \right)^2 + \left( \frac{2j-1}{2n} \right)^2 \right) \cdot \frac{1}{n} \cdot \frac{1}{n} = \frac{1}{4n^4} \left( \sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^n (2i-1)^2 + \sum_{j=1}^n \sum_{i=1}^n (2j-1)^2 \right) \\ &= \frac{1}{4n^4} \cdot 2 \sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^n (2i-1)^2 = \frac{1}{2n^4} \sum_{i=1}^n n(2i-1)^2 = \frac{1}{4n^4} \sum_{i=1}^n (4i^2 - 4i + 1) \\ &= \frac{1}{2n^3} \left( 4 \sum_{i=1}^n i^2 - 4 \sum_{i=1}^n i + \sum_{i=1}^n 1 \right) = \frac{1}{2n^3} \left( 4 \cdot \frac{n(n+1)(2n+1)}{6} - 4 \cdot \frac{n(n+1)}{2} + n \right) \\ &= \frac{1}{3} \left( 1 + \frac{1}{n} \right) \left( 2 + \frac{1}{n} \right) - \frac{1}{n} \left( 1 + \frac{1}{n} \right) + \frac{1}{2n^2} \rightarrow \frac{2}{3} \quad (n \rightarrow \infty) \end{aligned}$$

である。以上から、 $\iint_{[0,1] \times [0,1]} (x^2 + y^2) \, dx dy = \lim_{n \rightarrow \infty} S_n = \frac{2}{3}$  である。

定数関数  $f(x, y) = C$  は連続関数だが、定理 7.2 に頼ることなく直接 2 重積分を計算できる。

**例 7.11.**  $\iint_{[a,b] \times [c,d]} C \, dxdy$

$\Delta = (x_0, \dots, x_m ; y_0, \dots, y_n)$  を長方形  $[a, b] \times [c, d]$  の分割とし、各小長方形  $[x_{i-1}, x_i] \times [y_{j-1}, y_j]$  の代表点  $(\xi_{ij}, \eta_{ij})$  を任意に選ぶ。これらに関する  $f(x, y) = C$  の Riemann 和は

$$\begin{aligned} R(\Delta, \{ (\xi_{ij}, \eta_{ij}) \}, f) &= \sum_{i=1}^m \sum_{j=1}^n f(\xi_{ij}, \eta_{ij})(x_i - x_{i-1})(y_j - y_{j-1}) \\ &= C \left( \sum_{i=1}^m (x_i - x_{i-1}) \right) \left( \sum_{j=1}^n (y_j - y_{j-1}) \right) = C (x_m - x_0) (y_n - y_0) \\ &= C(b - a)(d - c) \end{aligned}$$

である。よって、分割の仕方と代表点の選び方によらず Riemann 和は一定なので、特に、 $|\Delta| \rightarrow 0$  における極限値もその一定の値に等しい。よって、以下を得る。

$$\iint_{[a,b] \times [c,d]} C \, dxdy = \lim_{|\Delta| \rightarrow 0} R(\Delta, \{ (\xi_{ij}, \eta_{ij}) \}, f) = C(b - a)(d - c)$$